

腫瘍（消化管）グループ

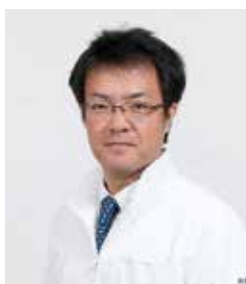


沢田 堯史（2010年卒）

遺伝子解析を用いた大腸癌転移に関する基礎的研究

リサーチ2年目の沢田堯史です。テーマは、「遺伝子変異情報を用いた大腸癌と肝転移に関する基礎的研究」という内容で研究させて頂いております。

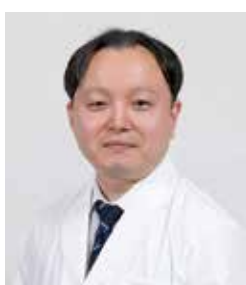
大腸癌の発生、進行、転移に関わる様々な因子が報告されてきているものの、未だ不明な点が多く残されております。転移、特に肝転移を促進する新規の因子の同定、メカニズムの解明を目指し、切除検体や細胞株を用いた研究を行っています。肝転移を有する大腸癌症例の原発巣、肝転移巣を用いた遺伝子コピー数解析で得られた候補遺伝子に対し、組織での蛋白発現を免疫染色で評価し、コピー数異常と蛋白発現の相関、臨床病理学的因子との関係等を検討しました。また、早期癌の肝転移症例に対して網羅的遺伝子発現解析を行い、新規の促進因子を探索しております。今後は、遺伝子改変細胞株での機能解析や、TMAを用いた発現評価を行い、臨床病理学的因子との相関を検討していく予定です。



宮岡 陽一（2010年卒）

南極昭和基地長期閉鎖環境下における隊員の腸内細菌叢の研究

2019年3月まで第59次日本南極地域観測隊越冬医療隊員の一員として南極地域に1年5か月滞在しました。そこで隊員に普段臨床で使用している酪酸菌や糖化菌等を含有した整腸剤を内服させ、その前後で便検体を採取し日本に持ち帰りました。現在、腸内細菌叢の変遷について次世代シーケンサーを用いたメタゲノム解析を行っています。今年度も現地隊員に協力を依頼し、便の採取を依頼しております。ほかの院生の研究とはだいぶ毛色が違っておりますが、今後人類が到達するであろう宇宙と類似した環境での研究を続けていきたいと思っております。



松井 博紀（2011年卒）

大腸癌において浸潤能を評価する新規病理学的因子である線維性癌間質反応(DR)と低分化胞巣(PDC)に関する研究

大学院3年の松井 博紀です。2019年度より消化管グループに所属して病棟業務に従事しながら研究を開始しました。HE染色で評価可能な大腸癌の新規病理学的因子で、TNM分類によるstagingとは独立して予後の層別化が可能なDRとPDCに着目し研究を行っております。2008年から2017年までに当科でRO切除を施行した大腸癌330症例の病理組織標本を再観察してDR分類とPDC Grade分類の評価を行い、それらの因子が当科の大腸癌症例においても予後層別化に有用であることを確認しました。今後は免疫組織化学染色や次世代シーケンシング法を用いて、DR分類およびPDC Grade分類によって大腸癌の予後に差が生じる分子生物学的メカニズムの解明を行っていく予定です。限られた時間を有効に活用して研究を進めていきたいと考えております。